



# 140minutes

Layback

## 時計

---

口のきけない少女は泣きながら時計を指さした。母親が調べてみると時計は既に事切れていた。明くる日、屋敷の裏庭で時計に火が点けられた。突然少女が言葉を発した。俺以外と話してはいけない。ずっと時計にそう囁かれていたと言うのだ。猛る炎に文字盤が歪む。立ち昇る紫の煙から呻き声が漏れた。

## 眠り

---

書いているのは私なのだが私ではない。種明かしをすると寝ている間に勝手に原稿が仕上がっているのだ。新作に取りかかる際にはいつも眠りの入口で声がする。「この作品は賞を取る」といった風に。ほら今まさに。「残念だがこの作品が遺作になる」私は深い眠りに吸い込まれていった。

## 移動

---

まただ。一冊の本の位置が変わっている。戻しても戻しても朝になるとその本はある本の隣に移動しているのだ。深夜、本棚から物音がしたので見にゆくと、例の二冊の間に豆本が挟まれていた。手に取ってみる。表にも中にもまだ何も記されていない。私はその子をそっと両親の元に戻した。

## レモン

---

彼女が唐揚げにレモンを絞ろうとした瞬間、声が出ていた。「おい」大きな声だったのだろう。水を打ったように場が静まり返った。「勝手に絞るなよ」それがいまだに友人にネタにされる2人の馴れ初めだ。だが。「パパ、レモン絞っていい？」今は多数決で負けるのだから仕方がない。「いいよ」

## 虫

---

改行のまったくない本を読んでいた。と、虫の字がとつぜんもぞりと蠢いた。あまりにも密度の高い本を読み続けたために目が疲れたのだ。そう思った。あっ。再び虫の字が動いた。虫は文字列を離れ、行間を一気に駈け抜けてゆく。頁から飛び出した虫は古畳の隙間に潜り込んでしまった。

## NO

---

答えはNOだ。夫は無表情な顔で答える。夫が問いかけにNOとしか答えられなくなってからもう半年が経つ。医者からは会社でなにか嫌なことでもあったのでしょうと言われていた。早く元気になってくれるといいんだけど。だって。愛情確認も大変なもの。ねえあなた、わたしのこと嫌い？

## 単語帳

---

窓際の席の結城君は今日も単語帳になにかを書き込んでいる。なんの勉強だろう？ 訊いてみたけど自分から話かけるなんてとてもできない。「なあ三崎、お前本好きだろ。これ俺が書いたんだ。読んでみてよ」私の手のひらに小さな小説。なんてね。私は読みかけのページに意識を戻した。



## 眼球

---

俺たちは眼球のスープの具としてぷかりと浮いていた。手探りでスープ皿を探す俺の顔には絶望的に真っ暗な眼窩が二つ。俺のレンゲが俺の左目の俺を掬い取った。俺の口が近づいてくる。俺の左目の俺が俺に食われるところをスープ皿の中の俺の右目の俺が見つめている。暗闇。食われた。

なぜこいつは反抗しようとししないのだろう？ 俺ならやる。「殺る」と言ってもいいぐらいだ。情けない。だから首を吊るはめになるのだ。影は床に滴る糞尿を避けるように少年の足元を離れた。ぬるぬると階段を滑り降り、玄関のドアの下をすり抜ける。あいつがやらないのなら俺がやってやる。

## 蚊柱

---

睨み合う二人の男は煙突から立ち昇る黒煙のように立派な蚊柱を頭上に纏っていた。この国では従える蚊柱の密度と高さで男の価値が決まる。男と男の争いは即ち蚊柱の奪い合いと相成る。沈黙の中。対峙する二人。やがて雌雄が決した。勝者の男は濛々たる蚊柱を引き連れその場から去って行った。

## 待合室

---

古い木造駅舎の待合室の中で石油ストーブに当たっていた。木製のベンチには近所の手縫いであろうと思われる可愛らしい座布団がほっそりと取り付けられていて隙あらば忍び寄りそうとする真冬の冷気から私のお尻を守ってくれていた。がらり。扉が開いた。「おそい」私は頬を膨らせた。

## 鉛色の町

---

林立する煙突から絶え間なく吐き出される煙のせいで空が鉛板のように重たく感じられる。この町に来てからずっと体調が悪かった。何もかもに疲れてしまっていた。勤め先の工場の前を素通りし、あてもなく歩いていると、空から一本の糸が下りてきた。糸の先には釣り針が結ばれていた。

## 神経衰弱

---

男はトランプで神経衰弱をやる度にこてんぱんにやられていた。「記憶力が悪い訳じゃないんだ。トランプの数字やマークが憶えられないだけなんだ」男は力説した。「じゃ何なら憶えられるんだ」「エロ動画のサムネイルなら」この言葉がきっかけでサムネ衰弱という伝説のアプリが生まれた。

## ブラ論

---

ブラのホックを外すのが得意だという彼氏の鼻を明かしてやろうとフロントホックのブラを着けて挑んだところこれまた呆気無く外されたので今度はスポーツブラを試してみた。彼は圧迫されたわたしの乳を一瞥して悲しそうな表情を見せた。うなだれた彼の息子は完全に戦意を失っていた。

## フルコース

---

食前酒は尿酒。眼球のスープ。生レバー。耳軟骨の唐揚げ。削ぎ落とした鼻のソテー。肛門から口までを一串に貫き、炭火で炙り焼いた豚人間のシュラスコ。そして髪そうめん。デザートが運ばれてきた。皿にこんもりと盛られたチョコレート色のスフレからほかほかと湯気が上がっている。



## 炭鋤跡

---

「なんや正吉、怖いんか」「阿呆、怖ない」意地を張り合いながら穴の奥へと進んでゆく。急に頭上でバサバサと羽音がした。蝙蝠かと思った。ところが懐中電灯の光に浮かび上がったのは黄色い羽だった。炭鋤跡から出ると正吉は丸めた両の掌を開いた。カナリアは、ぴい。と一声鳴いて飛び去った。

## 妨害

---

苦勞して仕掛けた網という網の全てが破られていた。これではとても使いものにならない。スリバスは溜息をついた。環境保護団体による妨害工作は日に日に酷くなるばかりだ。肩を落としながらベースキャンプに戻るとフェンスに横断幕が張られていた。【賢くてかわいらしい人間を殺すな！】

これが四課の刑事か。その人相風体はまさにジャパニーズ・ヤクザだった。サンタは病室のベッドの上に並べられた数枚の写真を見比べていた。「私を刺したのはこの男です」刑事は頷いた。「ゆっくり療養してください」サンタは自分の不運を恨んだ。まさかあそこが組事務所だったとは。

## スネア

---

巨大蟹の鋏はもはや片方を残すのみ。グリコランナーの腰も折れ曲がり、かつて10：50を示していた両手の位置は今や16：40。日暮れも近い。今日も一日中スネアを叩いていたが足を止める者は誰もいなかった。モヒカン連中が徘徊し始める前に行かねば。太郎は荒れ果てた戎橋を後にした。

## 成人式

---

成人式が行われるホールの前は晴れ着姿の若者でごった返していた。誘導をしていると、ベビーカーを押した女性に声をかけられた。「お手洗いはどちらですか?」「入られるとすぐ右手にありますよ」「ありがとうございます」「わあ。大きな赤ちゃんですねえ。何ヶ月ですか?」「240ヶ月なんです」

## スキップ

---

すごいリモコンを手に入れた。これでクリスマスがスキップできる。ええい。お正月もスキップだ。バレンタインデー？ スキップ。GWもお盆もスキップスキップ。そして再びクリスマスがやってきた。もう全てが面倒くさい。人生まるごとスキップしよう。ボタンを押してリモコンを放り投げた。●REC

## 消灯

---

気がつくともブラウン管の中に吹き荒れる砂嵐を眺めていた。部屋の畳にはうず高く埃が積もり、抜け殻の僕を取り囲むように蜘蛛の巣が張り巡らされている。ただ延長ひもの先にぶらさがるケロケロケロピだけが昔と変わらず優しく微笑んでくれていた。僕はそっと手を伸ばして電気を消した。

## that boy

---

毎年この日。少年は線路に横たわりひんやりとしたレールに耳を当てる。ごおという響きが次第に大きくなる。警笛。それでも少年は動かない。微笑みすら浮かべている。先頭車両の左の車輪が小さな身体を引き裂いた。少年の欠片はもろもろと形を失い紫色のヤスデとなって敷石に吸い込まれていった。



## 抱き枕

---

キャラクター抱き枕N子を購入した。単三電池2本で温もりだって感じられる。大満足だった。ところがある日突然。N子のお腹の部分がむくむくと膨らんできた。N子の眉間に皺が寄る。お腹の横のジッパーがするすると開き、中から小さなおっさんが出てきた。「だ、誰?」「枕の精や」

## 枕の精

---

「枕の精？」「せや。使われることによって枕には枕の精っちゅうもんが宿るんや。そんなことより兄ちゃん、抱き枕もええけど、あんたまだ若いねんから、ちゃんと生身の女の子と恋もせなあかんで。あとな。風呂だけは入りや。臭うてしゃあないわ」小さなおっさんは枕の中に帰っていった。

## 給食

---

退屈な朝礼の内容に欠伸をかみ殺していた。「今週いっぱい社員食堂がなくなることになった。来週からは給食が始まるそうだ。総務が言うにはうちの課からもひとり給食係を――」寝不足のせいか課長の話もいまひとつ頭に入っていない。「というわけで、山本。頼んだぞ」割烹着が手渡された。

## ザリガニ

---

朝、目が覚めるとザリガニになっていた。だが淳は平然としていた。どうせ引きこもりなのだから大して困りはしない。風呂だって最後に入ればいいさ。ところがある日、一番風呂に入りなさいと父親に言われた。食卓の上にはマヨネーズ。浴槽の湯は煮えたぎっていた。淳は全てを察した。

## 腕枕

---

こうして腕枕をしてやると彼女はすぐに眠ってしまう。俺と出会うまでずっと不眠に悩まされていたというのがまるで嘘のようだ。それにしても今夜はやけに腕が疼く。腕枕で痺れているのではない。ただ疼くのだ。と、突然二の腕の皮膚を突き破り、血まみれの小さなおっさんが這い出てきた。

## 大阪城

---

屋外で飲むワインに俺は上機嫌になっていた。「大阪城造ったんて誰か知ってるか」彼女はきょとんとする。「豊臣秀吉やろ」「残念。大工ですー」地響きがした。西の丸庭園の芝生に巨大な影が差す。顔を上げると大阪城が俺を見下ろしていた。『わしを造ってくれはったんは太閤はんや』

## ランチタイム

---

ノーネクタイが普及して、やっと襟元がすっきりしたかと思えば今度は猫も杓子も首から社員証をぶら下げているのだから世話はない。つくづく首輪の好きな連中だ。さて。今日のランチはどこでいただくかな。歩くたび、チリンと鈴が鳴っていたあの頃を、クロは少しだけ思い出した。

## サンタの街

---

もうサンタとかいいから。わざわざ駆け寄ってきてのこの台詞。子供にまで邪険に扱われて泣きたくなってくる。サンタの格好をしていてもチラシを受け取ってくれる人はほとんどいなかった。さもありなん。そもそも駅員もキャバ嬢もマックの店員も皆がサンタ姿なのだから有難味なんてある筈がないのだ。



## ぼくんち

---

「俺んちはこんなでかかったぜ」「うちなんて二段だったぜ」クラスメイトがクリスマスケーキ自慢をしている。「二段ってどういうこと？」ぼくの質問に丸山くんは不思議そうな顔をした。「丸いのが二段になってんだよ」「ふうん」丸いケーキを買う人もいるんだ。ぼくんちのケーキはいつも三角だった。

## 爺メール

---

遠距離恋愛中の彼女とは爺メールでやりとりをしている。配達夫の爺さんは足が悪い上にすぐ道に迷う。故にいつメールが届くか分からない。だがそのアナログ感がたまらなかった。ゲホッ。痰の絡んだ咳のような音が鳴り響いた。爺メールだ。彼女の「メリークリスマス」は26日深夜。僕に届いた。

## 温度管理

---

「この養殖場は大成功ですね」「温度管理が上手くいったのが成功の要因だな。だがこれ以上個体数が増えると、きっと殺し合いを始めるだろうから、あとは温度をぐっと下げて冷凍しておくか」地球に氷河期が訪れた。

## 美しいもの

---

この世からゴミが消え去り美しいものが世界中にあふれたとしよう。美しいものは即座に輝きを失いゴミ同然となることだろう。つまりお前のようなゴミが存在しているからこそ、美しいものは輝き続けることができるのだ。分かったか。分かったのならもう二度と顔を見せるな。閻魔に追い返された。

## 解散

---

「最後のM-1もあかんかったな」「約束は約束」「分かってる。ちょうど10年。キリもええことやし、コンビは解散や。おれはとりあえずなんぼかピンの仕事があるけど、おまえはどないするんや」「うちは主婦業をがんばる。あんたの稼ぎが悪かったら承知せえへんよ」「そんな殺生な」

## ヘンゼルとグレーテル

---

「お兄さん、今日は道しるべにする小石がないわ」「大丈夫だよグレーテル。さっきお父さんが自分のお弁当のパンをこっそりとくれたんだ。それをちぎって目印に落としていくからね」ところが、ヘンゼルがパンを落としてきたはずの地面にパンは見当たらず、かわりに小鳥が列をなして死んでいました。

## 当たり

---

三人が並んでボタンを押すことになっている。自分が当たりませんようにと神に祈る。嫌な匂いのする汗が滲み出てくる。合図のブザーが鳴り、私達はボタンを押した。隣の男があっと声を上げ、床に開いた暗闇に呑み込まれていった。私は震える手で自分の首にかけられていた輪を外した。

## スペースキー

---

深夜、締切前の原稿を書いていると、ふとスペースキーの隙間から髪の毛が出ていることに気付いた。取り去ろうとしても取れない。思いきり引っ張ると「痛っ」と声がした。もちろん部屋には私一人しかいない。おそろおそろスペースキーを外してみる。中から小さなおっさんが出てきた。



## 茶

---

黄金色の茶が入った。芳ばしい香りが実にたまらない。高級品であるので滅多に飲むことはなかったが仕事納めの今日ぐらいは贅沢をしてもバチは当たるまい。お、人柱が立っている。乾燥した老婆が茶の表面に直立して浮かんでいた。私はほくそ笑む。来年はきっと良いことがあるだろう。

## 断捨離

---

つづら折りの山道をやつれた軽自動車が下ってゆく。さっきまで渉の母が寝ていた後部座席も今は空っぽである。「リサイクルショップにも売れんし、粗大ごみに出すにはお金もかかる。しょうがなかったんや」ここは断捨離山。かつては姥捨山と呼ばれた棄老の地である。「ごめんなお母ちゃん」

## 物語り

---

ときどきわからなくなる。ぼくはだれのために小説を書いているのだろうか？ 自分のため？ それとも読んでくれる人のため？ 顔も知らない人のことを想って紡いだお話がはたして他人の心に届くのだろうか？ ぼくは迷いながらキーを叩き始める。いつしかぼくはその物語に夢中になっている。

## 煩悩

---

僕はね。心底うんざりしてしまったんだ。私利私欲にまみれた俗物だらけのこの世界に。だから僕は世捨人になる。山奥に籠って俗世間から解放されるんだ。その為にはまずインターネット環境と、四駆のクルマ、それにモンクレールのダウン、あとダナーのブーツも欲しいな、あとはあとは――

ボクが悪いのかい？ ママはキョウコにも問題があるって言ってたよ。まさかこいつがマザコンだとは思わなかった。見栄えのいい外国人男を連れ歩いては悦に入っていた若かりし日の自分を呪った。響子は浮気を正当化しセックスで懐柔しようとしてきた馬鹿夫のペニスを切り落として屑かごへ捨てた。

## 陽だまり

---

あのお部屋、暗くてジメジメしててやだな。ぽろりとかぼした言葉を聞いたおばあちゃんはわたしを陽の当たる縁側に連れ出した。見てな。おばあちゃんは両手で構えたバケツを陽だまりに振り下ろした。さあこれを部屋に撒いてきなさい。渡されたバケツの中には黄金色に輝く陽の光が波打っていた。

## おたまじゃくし

---

ガラスびんに閉じ込めておいたおたまじゃくしを譜面の中に放流する。おのおのが楽しげに五線譜の川を泳ぎ跳ね、めいめいがやがて好きなばしょにたどり着く。ぼくはそれを見て、ぽつぽつとピアノを弾き始める。きょうは明るい曲でよかった。なぜならきのうは少し悲しい曲だったから。

## 眠れぬ夜

---

眠れぬ夜を過ごす者たちがひとりまたひとりと街に下りてくる。コンビニ前に集まった者たちは手に手に武器を持っている。ある者は5番アイアン。ある者はドラムスティック。闇の王さえ倒せば眠れぬ夜など無くなってしまふ。そう言って城に攻め入った者たちはみな永遠の眠りに就いた。



## 欲望と失望

---

どうして欲しい？ 女を買うたびに訊きました。耳たぶを噛んで欲しい。鎖骨を舐めて欲しい。さまざまな答えが返ってきました。彼女は、首を絞めて欲しい、首を絞めて殺して欲しい、でも誰も叶えてくれないの。そう言って淋しそうに笑いました。美しかったですよ。彼女の最期の表情は

## うどん

---

死にたい。そう呟いた。すると空から一本のうどんが下りてきた。ごていねいに先っぽが輪になっている。バカにしゃがって。ところが輪に首を入れると体が浮き上がった。苦しかった。このコシ。讃岐うどんだったのか。俺は故郷を思い出した。初めて生きたいと願った。そこでぶつりとうどんは切れた。

「パパとママはどうやって知り合ったの?」「またその話か」「いいから!」「あれはたしか明け方の国道一号線。偶然同じ場所に落ちたんだよな」ゴムバンドのパパは軍手のママにウインクをする。「そうだったわね」「そして恋に落ちた」「それでそれで?」ゴム付軍手のぼくはこの話を聞くのが大好きだ。

## 自慰

---

「おれもうこの会社やめるわ」またはじまったよ。相原さんのやめるやめる詐欺。まあまあそう言わずに、と相槌を打つのもいい加減疲れてきた。前に笥先輩が言ってたな。「あいつはそれでガス抜きしてるんだよ。死ぬ死ぬ言って死なないやつと一緒にさ。いつも少しだけ自分を殺して慰めてるのさ」

## 告白

---

「久しぶりだね」「ああ」「君が転校する前に告白したの憶えてる？ 好きだって言ったら、どうせお前おれの足が目当てなんだろって」「そんなこと言ったか？」「言った。確かに君は足が速くて目立ってたけど」「すまん」「感謝してるよ。男から告白されても気持ち悪いって言わなかったもんね」

## 神秘の森

---

森の奥でばさばさと音がした。カラスかなにかが暴れているのかと思った。見に行くとエロ本が違うエロ本に覆い被さっていた。棒っきれで引き離してもまた二冊はすぐに移動し重なり合う。ばさばさばさばさと頁を震わせながら。子供だったあの頃は分からなかったけど今なら分かる。あれは交尾だ。

## 千里眼

---

「よーく探してみい。ほうほうに落ちておるよ」お爺さんが見せてくれたビニール袋には干し葡萄のようにひからびたソフトコンタクトレンズが山ほど入っていた。お爺さんはその一粒をぱくり。唾液で戻したかと思うと止める間もなく片目にはめた。「ほうほう。こりゃ絶景かな絶景かな」

## お好み焼き

---

「お好み焼き発祥の地は東京だとか大阪だとか言い出す奴がたまにいるが誰がなんと言おうとお好み焼きは広島が一番美味い。これはネットアンケートなんかでも60%以上の方が賛同していることからみても明らかなんだよ」「本当かよ。ソース出してみろよ」オタフクソースが出てきた。



## 成人式

---

晴れ着姿の彼女を連れてさりげなくホテル街にやってきた。「ちょっとなに考えてんの」平手でぺしりと頬を撫で打たれる。「一度は帯クルクルしてみたいじゃん。大丈夫大丈夫。成人式の日にはホテルにも着付けの人がいるから」「そうなの?」「うん」「なんで知ってんのよ」またぺしり。

## 小学生

---

成人式典の真っ最中、黄色い帽子をかぶった小学生がだだだっと中央通路を駆け抜けて行った。少年は通りすがりに通路際に座っていた俺の顔を見てにかりと笑った。見覚えのある顔だった。式の後、幼馴染に言われた。「お前、健二君のお母さんに会ったか？ 遺影を持ってきてたんだぞ」

## 四角い物体

---

水平線の彼方に影を見つけた。死に物狂いで泳ぎ着いてみるとそれは四角い物体だった。上には人が大勢乗っている。長時間の漂流で身体が冷え切っていた俺は彼らに乗せてくれと頼んだ。冷笑が返ってきた。「残念だがお前は101人目だ」四角い物体の隅にはイナバ物置と書かれていた。

## いきものがかり

---

いきものがかりが兎の世話をしているとしにものぐるいがちょっかいを出してきました。いきものがかりはその手を振り払おうとしますがしにものぐるいも引き下がりません。揉み合う内にふたりの身体は絡みつき、解けた時にはしにものがかりといきものぐるいになってしまっていましたとき。

## 顔本

---

今年は顔本が来るらしい。先輩が真顔で言う。そう言われても書店員になりたての僕には意味が判らない。訊いてみると表紙に顔が印刷された本だと言う。だから？ 何か問題でも？ 先輩はこれだから素人はという顔をする。「サイズだよ。天地2m。重さ1t。そいつが閉店後の店で本を食い荒らすんだ」

## 大阪沈没

---

大阪は海に沈んでしまった。濡れねずみの俺はづぼらやのフグに掴まりながらぶかぶかと浮かんでいた。その時、水平線の彼方で何かが光った。死に物狂いで泳ぎ着いてみるとそれは丸い物体だった。先客の手を借りて這い上がる。つるつる滑る足下にはチチヤスヨーグルトと書かれていた。

## あんパン

---

アンパン。あんパン。あんぱん。ううむ。表記に悩んでいると後ろで声。息子がお気に入りの人形で遊んでいる。「あぱんまん！」「アンパンマンでしょ」「あぱんまん！」抱き上げる。まだ乳臭く甘いこどもの匂い。「ア・ン・パ・ン・マ・ン。でしょ？」「あぱんまん！」俺は分らず屋にキスをする。

## あんパン親子

---

あんパンの親子が一行縦隊でぴよこぴよこと行進している。お母さんあんパンの後ろには、ひいふうみいよおいつむうななやあ、8匹の子あんパン。道行くサラリーマンやOLも足を止め、のどかな光景に目を細めている。今はまだ大丈夫。早く巣に帰るんだよ。ランチタイムが始まる前に。



## カーリング

---

町営スケートリンクに遊びに来ていた。隅ではカーリングの練習が行われているようだ。いや、待て、あれはストーンではない。近づいてよく見るとあんパンだった。あんパンを投げているのだ。なんと愚かな。あれではすぐに皮が氷に張り付いてしまう。私ならあんドーナツを使うだろう。

## 円盤

---

突然影が差した。巨大な円盤が太陽を遮っている。さっきまで真っ青な空が広がっていたのにいつの間に。それにしても奇妙な円盤だ。金属でも樹脂でもないように見える。暫らく観察していると、空軍の戦闘機が攻撃を始めた。煌く閃光。遅れて爆発音。パン屑とあんこが降り注いできた。

## 女豹

---

毛深い男って好きよ。彼女はそう言って艶めかしく微笑んだ。ホテルのバーカウンターでどちらともなく始まった二人の会話はベッドの上に着地した。女豹は俺の毛だらけの胸板を湿った舌先で舐め回している。突然舌の動きが止まった。彼女はげぼっという音と共に黒い毛玉を吐き出した。

ドン。と音が鳴り、足の固定されていない樹脂製テーブルの上のグラスが1ミリほど跳ねて水の表面に起きた波がぐるりと一周する。「ちょっと。あたしのはなし聞ってる？」顔を上げると彼女は漫画のように頬を膨らませている。「もう。なに考えてたのよ」「あんパンのことを考えていたよ」

## 立食い

---

目の前の雑踏から悲鳴が上がった。群衆が割れ、白目を剥いたゾンビが現れた。呆気にとられた俺は立食いのきつねうどんを手にしたまま全く動けない。ゾンビはのっそりと俺の方に近づいてくる。黄色い乱杭歯の間から漏れる腐臭が酷い。ゾンビは俺のきつねうどんから油揚げだけをさらっていった。

## 文学賞

---

モデル出身イケメン作家である私は文壇から無視され続けて今に至る。そのため文学賞にはほとんど縁がなかった。だがその私にも遂に運が回ってきたようだ。今回初めて直木賞の候補に上がったのだ。目の前の携帯電話が鳴った。「Mだが」『先生、おめでとうございます。ベストジャーニスト授賞です』

## 未来未来

---

未来未来。冬のある朝。孤児院の前には五つのランドセルが置かれています。「強く願えば空だって飛べるはず。頑張って勉強してください」お手紙も添えられています。気がはやるケン太君がさっそくランドセルを背負うと、ジェット噴射が起こります。ケン太君は青空の彼方に飛んで行ってしまおうのです。

## 井の中の蛙

---

井の中の蛙は生まれてこのかた一度も井戸の外に出たことはありません。よく晴れた青空を見るたびにジャンプを試してみましたがとても井戸の縁までは届きません。井の中の蛙にとっては湿った井戸の底と丸く切り取られた空だけが唯一の世界でした。そう。この雨が降り出すまでは。



## 波乗り

---

未来未来。朝から雪が降っている。行ってきます。拓はボードに乗り、一気に斜面を滑り降りる。山麓の学校まで約5分間のスノーサーフィン。今日のように軽い雪を滑るのも楽しいが、拓はいつの日か本当の波乗りをしてみたいと思っている。この氷河期が終わり、海が溶け切ったその日には。

## 銭湯

---

未来未来。おじいさんは孫の翔くんと銭湯に来ています。服を脱いだおじいさんと翔くんは縄梯子を登っていき、そろそろとお湯に浸かります。「ほおー。気持ちええのお」細かく区切られたステンレス製の浴槽は小人族にはちょうどいい大きさなのです。「おじいちゃん、コンビニって便利だね」

## 搾精機

---

男は裸のまま鼻輪と鎖で柱に繋がれている。いきり立った性器の先には搾精機が装着されている。男は蕩けた表情で涎を垂れ流している。次第に喘ぎ声が大きくなる。男の顔が紅潮してゆく。ぶるぶると震えたかと思うと男は腰を前に突き出した。搾精機が再び回転を始める。男はのたうち回る。

いつもは凶暴なゾンビが揃いも揃って月を見上げている。それほど今夜の月は美しかった。狼の遠吠えが静寂を破ろうともゾンビどもは微動だにしない。思えば可哀想な連中だ。死んでも死に切れぬのだから。涙とも膿ともつかぬ液体を虚ろな眼窩から垂れ流しながら奴らは月を見上げている。

## 音楽

---

無論音楽はライブで聴くのが本筋だろう。それは間違いない。だがアナログレコードだって捨てたもんじゃない。黒い円盤をプレイヤーに厳かに載せ、そっと針を落とす。iPodには無いその手順がいいんだよ。なに？ CD？ あるにはあるよ。ほらそこに。光る円盤が窓の外に吊るされていた。

## 袋

---

A子はネットで知り合ったRの家を訪れている。磨き上げられたキッチン。食器棚には色とりどりの袋が大量に収納されている。「すごいね」「袋を集めるのが趣味なんだ。まだまだあるよ。冷蔵庫の中も見ろ?」「冷やすような袋もあるの?」Rは微笑んでいる。「袋なのに?」Rは微笑んでいる。

## 満月の夜

---

少女は窓越しに指示を出す。ゆっくりね。少女の口の動きでそれを読み取った巨人は無言で頷く。観覧車は回り始める。まるで巨人が福引でもしているかのように見える。やがて少女は巨人の肩に乗って帰ってゆく。満月の夜の翌朝はいつもゴンドラの座席がひとつだけ夜露に濡れている。

## 髪

---

シャワーを浴び終わると排水口には抜け落ちた髪がごっそりと溜まっている。指先で摘み脱衣所の屑かごに捨てればいいだけの話なのだがそれが面倒臭い。数日の不精が祟り排水口は詰まる。不承不承私は垢に塗れた髪の塊を摘む。ぐいと引くと蓋が取れ、私の手には溶けかけた赤子がぶら下がっていた。



## 穴

---

いつもドーナツの輪の部分だけを食べて穴の部分は捨てていた。捨てるのならおれにおくれよ。猫のキャスが言う。あたしはいいよと言ってドーナツの穴をキャスの前に放り投げる。キャスはシャッと牙を剥き見事に穴をキャッチする。「それおいしいの？」キャスはおもむくしながらうんと首を縦に振る。

## 毛布

---

もう忘れちゃったかな。あなたが引っ越したばかりの部屋にはまだ家具もベッドもなんにもなくてそれどころか布団さえ配送の手違いで届いてなくてしょうがないからバイト先でもらったテレビを運ぶ時に巻いた毛布一枚にふたりでくるまってぶるぶる震えながらすごした夜のこと憶えてる？

## SF

---

憶えてるさ。きみは引越し当日だというのにまだ照明もカーテンも買ってないぼくの無計画さをなじっていたくせに暗がりの中で点けたテレビの明かりが部屋の壁と窓に反射しているのを見たたん、すごいすごいSFだSF、ブレードランナーの世界だよこれは。とか言って喜んでた  
だろ。

## 丸い穴

---

「卒業アルバム見せてよ」「みせてよ」娘まで妻の真似をする。「やだよ。トラウマだって言ってるだろ」「いいじゃない。見せてよ」「みせてよ」俺はアルバムを広げる。クラス写真撮影の日に風邪で休んでしまった俺は青空にぽっかりと開いた丸い穴の中から辛気くさい顔を覗かせている。

## 閉じた穴

---

「卒業アルバム見せてよ」「みせてよ」娘まで妻の真似をする。二人に促された俺は半ばうんざりしながらアルバムを広げる。空に穴がない。つまり丸で囲まれた俺の写真がない。三年八組。確かに俺のクラスなのに俺がいない。アルバムを覗き込む妻と娘の隣には他の男。俺はそれを空から眺めている

## M

---

「お帰りの際は絶対に振り返ってはなりません」意味が分からない。「お客様、お客様」俺のことか？ 振り返るとカウンターの中でピエロが笑っている。バーガー屋の店員は全員ピエロに変わっている。嫌らしい笑顔でピエロが手招きをする。「いらっしゃいませこんにちわぁいらっしゃいませこんにちわぁ」

## 水泳大会

---

ポロリもあると聞いたからテレビを点けたのに。始まったのは布団だらけの水泳大会だった。でもこれある意味おもしろいわと思って観ることにした。布団も枕も沈む沈む。中綿やら羽毛やらそば殻やらがポロリしまくるわ枕の精は溺れているわでプールの中は半ば阿鼻叫喚の図と化していた。

## 捲れる

---

吐き気がする。服に付かぬように勢い良く吐き飛ばそうとすると口蓋が外側に捲れ上がる。折れた歯が道路に零れ落ちる。蠕動は止まらない。口角が裂ける。俺は捲れてゆく。完全に捲れて裏返しになった俺は敏感な躰の内側を道路に擦り付けながらのたうちまわる。嗚呼。痛気持  
いいいい



## 召使い

---

女王が指を鳴らすと細身の男は手品の要領で虚空から煙草を取り出した。女王がそれを口に咥えた途端、松明を持って立っていた男が口から火を吹く。女王は美味そうに一服する。跪く俺の顔には煙。仕事は女王の煙草係だと聞いた。煙草を差し出す男。火を点ける男もいる。ということは――

## 捕物

---

熊が走っている。着ぐるみの熊が。商店街に揺れる人波はドレスの背中ファスナーを下ろした時のようにきれいに二手に割れてゆく。追う警官達が駆け抜ける。また演習か。時は23世紀。犯罪発生率はほぼ0%となり、もはや町へ下りてくる熊を捕まえるくらいしか彼らの仕事はなかった。

## 世界

---

僕の頭の中の回廊には読んだ本の数だけ扉がある。つらい時にはそれを開ける。するとそこには別世界が広がっている。もちろん楽しい世界ばかりじゃないし悲しい世界だってあるのだけれどそれでも現実の世界よりはずっとましだった。昔の僕のような子供の為に新しい世界を作るのが今の僕の仕事さ。

これはカニバリズム的な食人行為ではなくてどちらかというと言虫植物的な捕食行動だと考えてもらった方がいいかな。男性は彼女が絶えず放っている甘い香りに誘われてベッドを共にし自ら進んで彼女の股ぐらに顔を埋める。すると彼女の性器は口を広げ、彼の頭を飲み込んでいく。という訳だよ。

## 珍獣

---

そいつは珍獣屋の隅にいた。どす黒い煙を身に纏い碧色の瞳を光らせている。店主の老人は言う。「飼う事自体は簡単だ。値段は無料。散歩も要らない。それどころか水や餌さえ必要ない。ただね。飼い慣らすのは難しいよ。最後には皆食われちまう」僕は彼の名前を尋ねた。「ルサンチマンさ」

## 青春

---

パパ、この曲知ってる？ 娘が久しぶりに話しかけてきた。携帯から流れる音楽はチープで、でも純粹で、初めて耳にしたあの時のように肌が栗立つのを感じた。俺は古いCDをまとめて放り込んでいた箱を屋根裏部屋から下ろす。娘は呆れている。あった。「ザ・ブルーハーツ？」そう。俺の青春。

農園では年端もいかぬ子供達が働いていた。「これは児童労働ではありませんか」「子供を働かせて悪いかね。次女は家で弟の面倒を見ている。それも仕事だ。仕事をする中で彼らは大人のルールを学んだ。君達の国では20歳になってもまだ学校があるんだろう？ いったい何を学んでいるんだね？」

「もっと、もっとよ」彼女はさらに激しい愛撫を求めてくる。私は指先に神経を集中して彼女の「いい場所」をこすり続ける。「ああっ」ぶるぶるっと震えたかと思うと彼女は急に静かになった。完全に失敗だ。絶頂に導くまで突起物をこすり続けないと喘ぎ声が止まらない目覚まし女だなんて。



## コンビニ

---

シューマイの上のグリーンピースは要るか要らないかで言い争いをしたあと俺と彼女は手も繋がずに夜の街を歩く。コンビニは？ 彼女が指差す。俺は頷く。かごを手にして店の奥へと進む彼女をよそに俺は週刊プレイボーイを立ち読みする。行くよ。尻を突つかれる。俺のプリンは？ 買った。彼女は頷く。

## 風船

---

ゾンビどもはいつも空を見上げている。かわいそうだと娘が言うので私はそれなら風船を付けてあげようと提案する。玩具屋で買った風船を彼らの首に結えつける。ガスを入れると彼らは浮かぶ。両手を掲げ、空を見上げたまま昇天してゆく。数分後、ぼとりぼとりと首と胴体が落ちてくる。

## もずく

---

海のもずくにしてやるよ。と残念な魔女に言われて今俺はここにいる。いつ誰の食卓に上がるのかと考えると夜も眠れない。冬の海で藻屑もキツそうだがよく冷えた陳列棚も十分キツイ。おっと。客の手かと思ったら店員。どうやら賞味期限が来たようだ。Goodbye My World

## 温もり

---

電気を消してという言葉が無視して彼女の背中のファスナーを下ろす。透き通るような素肌にもファスナーが付いている。「見られたくなかったの」俺はシャツを脱ぎ背中を彼女に見せる。「あなたも？」人肌を脱ぎ捨てた俺たちは冷え切った透明の躰を寄せ合い溶け合って温もりを取り戻そうとする。

## 涙

---

あの時は右目に眼帯をしていたせいから左目だけから涙が溢れてきて部屋が海になった。今では右目からしか涙は出ない。左目の涙はきっとあの時涸れてしまったのだ。そう思っていた。薬指に指輪が嵌められる。お父さん。また私にも家族ができたよ。左目から零れる涙。教会は海になる。

## 胸の穴

---

ちょうどみぞおちのあたりにぽっかりと穴が空いていた。直径25センチ位。血が出るわけでもなく痛むわけでもない。穴のふちはじつになめらかでございねいにうぶ毛まで生えている。胃とか肺とかどこ行ったんだよ。ふしぎとめしはふつうに食える。ただ。身体の芯がただただ寒かった。

## 物語る

---

物語るために作られた僕はあかりちゃんのために幾千ものお話を紡ぎ続ける。でもあかりちゃんはもういない。パパとママもいない。お掃除ロボやお料理ロボは毎日仕事を続けている。僕は物語ることしかできない。あとお花を手向けることぐらいならできる。あかりちゃん、今日のお話はね――

## クイズ

---

彼女は俺が何を訊いてもクイズで返してくる。はじめて会ったときからそうだった。「いくつ？」「いくつに見える？」「血液型は何型？」「何型だと思う？」「仕事は何してるの？」「何してる人に見える？」そしてそれは今でも。「なあ。俺のどこが良かったんだ？」「どこだと思う？」



## 老人

---

どこから忍び込んだのか乞食の老人がピアノの前に座る。星屑が降り注ぐような演奏にその場に居る全ての人間が言葉を失う。「肉はあるか？」弾き終えた老人は店主のトニーに尋ねる。「スペアリブなら」「ギャラはそれでいい」包みを受け取った老人は表に繋いでいた老犬と共に消えた。

## 生首

---

畑には生首が生えている。ひとつ掘ってきなさい。息子に言いつける。これはまだ子供じゃないか。何度言ってもこの子は掘りやすい子供の生首を掘ってくる。戻してきなさい。今度は若い女の生首。これはいいぞ。寸胴鍋に放り込む。ブーケガルニを浮かべる。息子よ。今夜はシチューだ。

## 春場所

---

春になると大阪に力士の亡霊が現れる。賑わいを見せていた往時の春場所を思い出すのだろう。ちゃんこごっつあんです。ちゃんこごっつあんです。繰り返しながら練り歩く浴衣姿の力士たち。荒くれ者の再来に街人たちは塩をまく。浴びた力士の亡霊はナメクジのように溶けてなくなる。

## 深夜書店

---

終電を逃した俺は千鳥足で寝静まった街を歩く。闇の向こう。ぼんやりと浮かび上がる店。深夜書店と書かれている。営業時間0:00~夜明けまで。本好きの血が騒ぐ。がらりと扉を開ける。夜中だということにちらほら客がいる。俺は文庫本を買う。店主の親父は木の葉の葉を挟んでくれる。

## 最終兵器

---

ピアンは途方に暮れる。地球人を滅亡させた兵器を見つけ出すことが彼の使命だった。古文書に記されていた社はたしかにここだ。だが。桐箱の中に封印されていたのは黒ずんだバナナの皮だった。ピアンは想像してみる。バナナの皮がこの星に引き起こした悲劇を。まったく想像できなかった。

## 妻

---

妻を殺した。発端はこの足だ。「何だその大根は」「ひどい」「太い足を大根と言って何が悪い」くだらない。浴室にまな板と鋸、出刃を持ち込み大根を輪切りにする。お次は桂剥きだ。薄くスライスされた肉の巻物を今度は細く細く刻んでゆく。すると妻がツマになる。笑いが止まらない。

## 手羽

---

手羽はバランの草原を駆ける。煮物から零れる出汁も執拗にへばりつく飯粒も気に留めず。手羽はバランの草原を駆ける。弁当箱の箱庭は昼時までのサバンナ。手羽は胸肉や腿肉を懐かしみながら最後の命を燃やす。チャイムが鳴る。ついに手羽は人の胃に落ちる。骨がカランと音を立てる。

## 異臭

---

手術室は異臭に包まれている。だが医師達は平気な顔をしている。マスクで見えないが鼻の下にメンソレータムでも塗っているのだろうか。羊たちの沈黙のクラリスのように。「ずいぶん溜められましたね」執刀医が笑う。手術台の脇には俺の体の中から取り出された胸糞がうず高く積み上げられている。



## お絵かき

---

外でお絵かきができるんだぞ。ろう石を見せると娘は目を輝かす。自宅前のカンバスに娘はすっと線を引き始める。次々産声を上げる動物たち。いつしか私も童心に返っていた。夕飯よー。妻の声。それを合図に動物たちは道路の中に帰ってゆく。白線の上には私と娘の長い影が伸びていた。

## 犬

---

犬は波打ち際を歩いている。彼は日曜日になると海岸に姿を見せる。手頃な流木を見つけた犬はぶんと首を振り、それを砂浜へ飛ばす。そして追いかける。私は以前、彼があるサーファーとよくそうやって遊んでいたことを思い出す。一人遊びをやめた彼は砂浜に座り、じっと海を眺めている。

2月14日

---

2月14日。駆け込みでチョコを選ぶ女の子に混じって男の子が一人。もう30分近くも悩んでいる。見かねた私は品出しついでに声をかける。「これなんてどうですか？」男の子はこくりと頷く。会計を済まし、紙袋を手渡すと「受け取ってください」男の子は顔を赤らめてそれを差し出した。

## なまこ

---

ずずずずず。外でなにかを引きずる音がする。きつとなまこが這う音だろう。めくれた人のことをなまこと言う。ぐぐぐぐぐ。呻き声。それは痛かろう。なにしろ内臓が剥き出しなのだ。なまこを散歩させている人に尋ねると、慣れればかわいいものよと言う。わたしには理解できない。

## 雨垂れ

---

俺は目覚める。時計を見てはっとする。寝坊した。折角の休日なのに。ぽとぽとと雨垂れの音。俺はほっとする。雨ならしょうがない。本当は片付けたい用事が数件あった。だが雨ならしょうがない。カーテンを開ける。世界は真っ白だった。ほおっと間抜けな吐息が漏れる。雪ならしょうがない。

## マジレス

---

「パパ何チョコが好き？」「パパは甘いものは嫌いなんだ」しまった。マジレスしてしまった。娘の顔がくしゃくしゃになる。大雨が降り出した。「どうしたの!？」妻が飛んで来る。「いや、べつに」雷が落ちる。「本当にあなたは10年前から何も変わってないわね」申し訳ありません。

## Stand

---

あなたが首を縦に振るまで僕はここを動きません。バカな男ね。外はこの雪。どうせすぐ逃げ帰るに決まっているわ。男はまだ立っている。もう帰ったかしら。男はまだ立っている。さすがに心が揺れる。今や男の体はすっかり雪に包まれている。だが股間の一物はしっかりと屹立している。

## 同棲

---

「同棲かぁ。節約はできるけど、お前の親が」「うちの親は賛成だよ」「裸族で過ごせなくなるし」「パンツだけ穿いててくれたらいいよ」「変顔もできなくなるし」「すればいいじゃん」「テンション上がった時にひとりで踊ることもできなくなるし」「一緒に踊ろ」拒む理由がなかった。



## ダシがら

---

「捨てちゃだめ」後ろから妻の声。「なんだい。ダシがらの煮干しを食べるって言うのかい？」  
「ばかね。これよ」妻は小さな箱を見せる。「ダシループよ。一晩でダシが充填されるの」エネループみたいな物か。私は小箱に煮干しを入れる。「向きが逆。HとTって書いてあるでしょう？」

## 点棒

---

立直。深緑色の海に小魚が跳ねる。千点棒が足りないと言っていると齊藤はどこからか煮干しを数本持ってきた。これでいいよと齊藤は言う。なにがいいのかさっぱり分からなかったが、我々は皆、立直をかける時には必ず煮干しを投げている。てなわけで、ツモ。立直、一発、ツモ、平和だ。

## 点滴

---

毅が新米看護婦に当り散らしていると婦長が飛んできた。カルシウムが不足しているよね。婦長は点滴の袋に煮干しを入れようとする。おい！ やめろ！ 薬液が茶色く滲む。ぶるり。煮干しが動く。煮干しは身をくねらせ袋の中を泳ぎ始める。誰か！ 出し汁はもうすぐ血管に到達する。

## 迷子

---

スエの携帯電話が鳴る。『おばあちゃん、今近くの空まで来てるんだけど家の場所が分からないよお』「しょうがない子だねえ。それでも魔女っ子かね」スエは窓の外の甲子園球場に向かって杖を振る。ジェット風船が空に舞い始める。『あ、風船が見えた!』「それを目印に降りておいで」

## 床屋

---

パナマの街外れにある床屋に来た。看板も何もない。ただ爺さんが切り株に座って新聞を読んでいる。俺が自分の髪を切る仕草をしてみせると爺さんは腰を上げた。ここに座れ。首を傾けて促す。俺は切り株に座る。爺さんは読んでいた新聞を器用に俺の首元に巻きつける。鋏が吠え始めた。

## 置き土産

---

ほら、普通に置いておくと、一気に全部食べてしまうだろう？ 甘いものに目がない彼は口を尖らせて言う。だからさ、チョコを開けた時に分散して隠しておくんだよ。そうしてそのまま忘れられてしまった置き土産をわたしは冷蔵庫の奥から発見する。何回目だろう。いい加減忘れさせろよ。ばか。

## 転ばぬ先の

---

そろそろ外へ出てみるか。窓から差し込む春の日差しがそう思わせるのだ。しかし。長年に亘る引きこもり生活で衰えた足腰。もし転んで足でも折ったらどうする。頼る友もない私はAmazonで松葉杖をポチる。これで一安心。が、モノが届くまでは外出できない。そして、また一日が終わる。

## 開放感

---

尿意を堪えながら執筆を続ける。膀胱はとうに満タんだ。だがここで流れを切るのはよくない。乗りに乗っているのだ。下腹部からせつついてくる尿意は痛みに変りつつある。出来た。遂に第一稿の完成だ。この開放感こそが「書く」醍醐味なのだ。股間に広がる温もり。膀胱も開放されたようだ。



## SR

---

奴はバイク屋にいた。俺のSRだ。事故で廃車にしたはずなのになぜここに。目を擦る。間違いない。キーは付けっぱなしだ。気づけば跨っていた。俺は走り出す。アクセルを吹かすと国道は滑走路となり俺とSRは離陸する。思い出した。俺、死んだんだな。ありがとう、迎えに来てくれて

## 少女

---

「なにしてるの？」いつも絵本を読みに来る少女だった。私は書き終えた張り紙を彼女に見せる。「もうすぐお店を閉めるんだ」「どうして？」「本が売れなくなっちゃったからね」明くる日も現れた少女は怒ったような顔で絵本を読みはじめる。布のかばんからくまの貯金箱が覗いている。

## キャッチボール

---

続けてまっすぐを投げる。今度は体重移動を意識する。指先に縫い目がかかる。ぱしん。グラブが良い音で鳴る。痛いよ。彼女はしかめ面をする。俺はキャッチボールができる子としか付き合わない。彼女はほら、カーブを投げてもついてくるし、なにより投球フォームがとても綺麗なんだ。

## 瞳

---

潤んだ彼女の瞳から甘い香りが漂う。羽虫が寄ってくる。睫毛に留まった途端、彼女の瞼は閉じられる。羽虫がいくらかがこうとも、もう遅い。彼女の涙に溶かされるのだ。なに痛みなど無きに等しい筈だ。彼女の痛みに比べたら。瞳からしか養分を採る事の出来ない女をおれは飼っている。

## 哀歌

---

軽いよ。あなたは軽すぎるの。彼女のため息のせいで起きた腹肉のさざ波に飲まれておれは呼吸困難に陥る。ドルフィンスルーもできやしない。なんとか肉をかき分け再び腰を振りはじめ。だめよ。ぜんぜん届いてないし響いてこないの。おれは天を仰ぐ。体重差120kgのエレジー。

## 台詞

---

彼女の誕生日。示し合わせた"通り終電で帰宅する。「遅かったわね」怒りの声。「仕事なんだからしょうがないだろう」「仕事と私とどっちが大事なのよ」彼女の表情が緩む。「満足したかい？」俺はプレゼントの包みを渡す。「あーすっきりした。一回言ってみたかったのよね。この台詞」

## パスタ

---

あなた。夕飯はパスタよ。「今日も」だろ。俺は小さく呟く。浴室に行きハンドルを回すとシャワーノズルからスパゲッティーニが出てくる。シャンプーボトルを三回プッシュ。ミートソースをかける。せめて湯船に浸かりながら食べようと思ったら。中にはラザニアが敷き詰められている。

## 黒い指

---

原付が故障して困っている時に助けてくれたのが彼だった。近くのバイク屋さんのお兄さん。服装は全然お洒落じゃないし指はいつも油で黒く汚れていた。でも今まで付き合った誰よりも優しかった。指、挿れてもいいんだよ？ 石鹸でしつこいぐらいに洗ってくれてるの知ってるんだから。



## 酒と女

---

ビールを飲んで女とセックスをする詩人の物語を読んでいた。いったいこの男は何本ビールを開ければ、そして何人の女と交われば満足するんだ？ 数えはじめた。缶ビールが541本。女は33人。一冊の中でだ。俺は正の字で埋め尽くされた紙片を握り潰す。童貞の俺は酒が飲めない。

## たぽん

---

体が浮き上がったかと思ったら落下した。悲鳴を上げる間もなく落ちてゆく。たぽん。なにか柔らかいものにキャッチされる。ウォーターベッドみたいだなあこの感触。するりと中に吸い込まれる。僕はスライムになっていた。なんだかとてもなつかしい気分だった。「よお」勇者が現れた。

## 骨

---

水槽の青い照明が闇に滲む。魚の骨が泳いでいる。乾いたノックの音。ドアが開く。「まだ起きてるの?」「ああ」廊下の明かりに妻の骨のシルエットが浮かぶ。「そう」ドアが閉まる。冷たい骨だ。私は若かりし日の彼女を思い出す。弾けた笑顔も、崩れた泣き顔も、もう二度と拝めない。

鏡を見て唖然とする。十代の頃から皆の垂涎の的だった美肌が今や見る影もない。化粧品を見直した。サプリメントも摂り始めた。それでも肌の粒子は日に日に荒くなってゆく。ある朝、私の顔はドット絵になっていた。そして数日後にはモザイクに。道行く人々が私を見て目を細めている。

## 雨ふり

---

「ゆか雨すき」「どうして?」「パパが家にいてくれるでしょ。まいにち雨だったらいいのに」「それじゃ仕事にならないじゃないか。ごはんが食べられなくなるんだよ」「おなかがすいてもがまんでできるもん。ママだってきっとそういうよ。ね、ママ」写真立ての中で陽子は微笑んでいる。